

4 章 2014 年度 COC 事業による「地域貢献」

学生の取り組み紹介

2014年度市民公開講「共に学ぶコミュニティケア」

2014年度シンポジウム「地域住民と共に創る、地域包括ケアシステム」

神戸市看護大学まちな保健室出前講座の実施

笑い与健康

コミュニティ育成支援事業

もの忘れ看護相談

こころと身体 of 看護相談

その他の社会貢献活動

民生委員・主任児童委員実務マニュアルの作成支援

須磨区民生委員・主任児童委員研修での講義

地域事業への参加

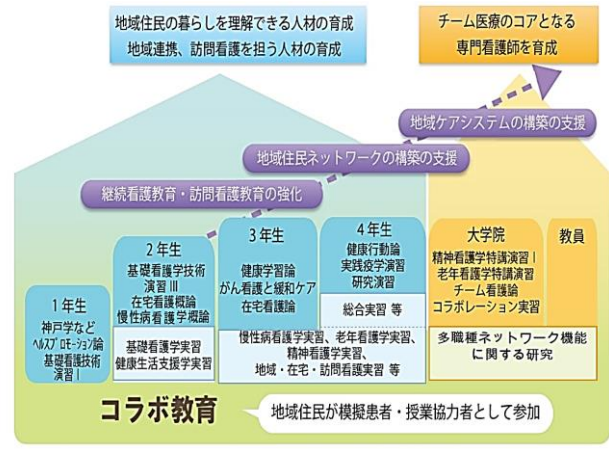


学生の取り組み紹介

コラボ教育とは

- COC事業のカリキュラム改革を支える柱として、位置づけられており、すべての学生が地域や住民の暮らしを理解し、地域課題の解決に貢献できる看護専門職の育成を目標にしています。
- 1年次の**ヘルスプロモーション論**のように、地域住民の身近な場所で講義を行うことで、住民の方にも参加いただき、学生は住民とともに講義内容と同時に、住民の方の健康増進の実際について学ぶことができます。
- 基礎看護技術演習**のように、地域住民の生活拠点で健康測定等を実施し、住民の方の健康への意識や関心を高める機会となると同時に、**教育ボランティア**として、大学の教育に参加いただきます。

カリキュラム



1年生で学ぶこと

「ヘルスプロモーション論」

住民の方を対象とした、健康教育の実際について、先生が行っているのを参加見学。地域の健康増進するには、どんなことが必要かを学びます。



H26年度のテーマは、「笑いと健康：笑いで認知症予防」でした。



住民の方と一緒に講義を聞きます。

学生さんもステージにあがって、一緒に“笑いヨガ”を実践！



2年生で学ぶこと

「基礎看護技術演習Ⅲ」

住民の方を対象に、ヘルスインタビューや健康測定を実施して、地域で暮らしておられる方の健康状態について、総合的にアセスメントします。

呼吸・循環器系、筋・骨格器系、栄養状態についてアセスメントします。



ヘルスインタビューでは、住民さんの日常のこと、健康のことをお聞きします。



地域福祉センターをお借りして実施します。



ご協力いただいている、民生委員さんと

関節の動き（関節可動域）を調べます。



2014年度 市民公開講座



テーマ ▶ 共に**学ぶ**コミュニティケア

日時 ▶ 2015年2月28日(土) 13:30~16:30
(受付13:00~)

会場 ▶ 須磨区役所4階 多目的会議室(定員200名)
(神戸市営地下鉄/山陽電車
板宿駅から徒歩5分)

参加費
無料

プログラム

13:30 開会挨拶

13:50~15:20

第1部 報告・特別講演

「いきいきと安心して暮らせる地域づくりに向けて」

【報告】

「認知症高齢者が生き生きと安心して暮らせる地域づくりに向けて」

石井久仁子氏(神戸市看護大学)

「須磨区における地域福祉の担い手の発掘とネットワークづくり」

榎一美紀氏(神戸市須磨区社会福祉協議会)

【特別講演】

「地域において認知症の方とどう向き合うか？」

沖田裕子氏(大阪市社会福祉研修・情報センター)

15:20 休憩(15分)

15:35~16:30

第2部 大学生、教育ボランティア、自治体関係者との
リレートーク「官学民協働のコミュニティケア」

※お申し込みは、裏面をご参照ください。

お問い合わせ先:神戸市看護大学地域連携教育・研究センター TEL 078(794)8080

主催:神戸市看護大学 共催:神戸市須磨区役所、神戸市須磨区社会福祉協議会 後援:神戸市

2014年度 市民公開講座 ～共に学ぶコミュニティケア～

平成27年2月28日（土）に、神戸市須磨区役所4階多目的会議室において、神戸市看護大学地（知）の拠点整備（COC）事業 第1回市民公開講座を開催した。今年度は「共に学ぶコミュニティケア」をテーマとし、超高齢社会において地域包括ケアシステムが目指す、「地域住民が安心して暮らし続ける街」について、市民とともに共に学び、考える機会とした。地域住民や民生児童委員、ボランティア、保健・医療・福祉・介護の専門職など186名が参加し、認知症をはじめとする多様な地域課題に対し、一人ひとりがどのように考え、取り組んでいくのかを考える機会になった。以下、プログラム内容に沿って、概要を紹介する。なお本会は、神戸市須磨区役所、神戸市須磨区社会福祉協議会との共催で実施した。

【開会の挨拶】松葉祥一（神戸市看護大学教授、図書館長）

神戸市看護大学は、開学以来「地域と共に学び、共に歩む」ことを目指してきた。昨年度は文部科学省の「地（知）の拠点整備（COC）事業」に採択され、「共に学び、共に創る、コミュニティの拠点づくり」を目指して取り組んでいる。日本では2025年に高齢者数がピークを迎えるが、神戸市の高齢化率は政令指定都市中5位と高く、特に須磨区のニュータウン地区では高齢化率が40%に達する地区もある。本学は、COC事業を通し、神戸市が高齢化対策として掲げている、「訪問看護の人材育成」「医療連携の強化」「地域ケアシステムの構築」「地域住民のネットワーク構築」の課題解決に取り組んでいる。具体的には、地域住民が実習・演習・講義に参加する地域連携教育（コラボ教育）を中心に「地域住民の暮らしを理解できる人材の育成」「地域連携、地域における看護を担う人材の育成」に進めていく。また、研究や地域貢献事業を通してさまざまな取り組みを行っている。本日の市民公開講座では、市民の皆さんとこれからのコミュニティについて共に考え、学ぶ機会としたい。

【開会の挨拶】谷 真行（神戸市須磨区保健福祉部長、社会福祉協議会事務局長）

須磨区は平安の時代から続く歴史と文化や自然環境のある街である。区民アンケートにみられるように、市民からは「住みやすい街」「住み続けたい街」として評価をいただいている。しかし、有識者による日本創生会議で「人口減少による消滅可能性のある市区町村」として、神戸市では唯一須磨区が挙がり、統計的にも須磨区は兵庫区長田区など他区に比べて高齢化のスピードが早い。しかし、そのような中でも地域住民がいきいきと生活することができる。北須磨地区では自治会等が中心となり、地域情勢に合わせ、保育所や高齢者施設など必要な施設の整備に取り組んできた。また、挨拶運動をモットーに街で会う方々に声をかけている。挨拶は重要で、声をかけあうことが防犯につながり、街の治安がよくなる。このように、近隣が気にかかけあい、各種団体がさまざまな取り組みをしている。今日の市民公開講座が実りある1日になることを願っている。



【第1部】いきいきと安心して暮らせる地域づくりに向けて

座長 片倉直子（神戸市看護大学 教授）

○研究報告—認知症高齢者がいきいきと安心して暮らせる地域づくりにむけて

石井久仁子（神戸市看護大学 助教）

認知症の周辺症状の1つである徘徊は、行方不明や事故等で死亡する危険性もあり地域の見守りが重要である。須磨区では平成25年に「須磨区捜してネット」を立ち上げたが、認知症高齢者の地域生活を支えるには、SOSネットワークの構築だけでなく、地域住民と専門職が共通の認識や理解を図ることが求められる。本研究では、認知症の方を地域で支えることの課題と取り組みについて検証することを目的にワークショップを開催した。その結果、「認知症の方もいきいきと安心して暮らせる地域づくりを阻む課題」として、「当事者意識がない」「認知症の方が安心できる居場所がない」「地域のつながりがない」の3つが重点課題として抽出された。専門職・地域住民共に認知症に関する知識や地域情報不足が共通問題としてあがったことから、住民間ネットワークの希薄化と世代間交流の少なさに関する課題解決が重要であると考えられた。次年度は認知症高齢者の見守り事業に関する課題について、アンケート調査を実施し、地域の見守り体制の整備構築に向け検討する。



○活動報告—須磨区における地域福祉の担い手発掘とネットワークづくり

梶一美紀（須磨区社会福祉協議会 地域福祉ネットワークカー）

地域ネットワークカーは、神戸市において平成23年度から配置され、須磨区では今年度から配置された。「制度の狭間」という言葉があるが、地域生活の中では制度では対応しきれない生活課題がたくさんある。地域ネットワークカーは、そのように既存の取り組みでは解決できない生活課題について取り組んでいる。社会福祉協議会は、社会福祉法に基づき、地域福祉の推進を行う機関で、神戸市では9区とも区役所内に設置されている。地域福祉の現状は少子高齢化の中で課題が多くなってきている。特に地域支援の担い手不足についてもよく言われており、神戸市では今年度から「担い手支援モデル事業」を実施している。担い手づくりとして、白川地区で30年の取り組みを行ってきた白扇会ふれあい給食会や、「板宿・東部・だいち中部地区」の3地区合同研修会の取り組みをモデルに考えると、「振り返り（HOP）」「話し合い（STEP）」「夢を見る（JUMP）」が大切だと考えている。この「担い手支援モデル事業」実施を通じて、一緒に考え、学ぶ、「場づくり」、地域住民も専門職も「共につながる」こと、相互に発信し、「伝え合う」ことを推進しながら、地域に合わせた「担い手支援・発見・養成」が私たちの課題だと考えている。



●特別講演—地域において認知症の方とどう向き合うか？

沖田裕子氏（NPO法人 認知症の人とみんなのサポート 代表）

「地域において認知症とどう向き合うか」、これは、「認知症の人を向こう側に置いて考える」のか、「自分も認知症になるかもしれない」と考えるかによって違って来る。自分のこととして考えていただきたい。認知症は「症状」であり、その原因となる病気はさまざまである。また年相応のもの忘れと認知症のもの忘れは違う。認知症には中核症状とBPSD（行動心理症状）があり、暴言・妄想



などのBPSDは二次的に起こる症状で、「したいことがうまくできない」ことから起こっている。「片づけをしたいのに収納場所がわからなくなって探すため、片付けたいのに片付かない」などが一例である。DVDの事例から、特徴や関わり方を紹介したい。「金蔵さん」は80歳過ぎまで表具職人として丁寧さを信条に仕事をしてきたが、数年前にアルツハイマー型認知症と診断され、現在はグループホームに入居している。日常では納得できないことがあると思わず怒鳴ってしまうのでトラブルを起こすことも多い。もの忘れの症状が進み、朝と夜の時間の区別もつきにくくなってきた金蔵さんに、スタッフは探し物を見つけやすいように声をかける支援をしている。この「自分でみつける」ことが大切である。職人気質で自分のことをうまく表現できない金蔵さんに対し、スタッフは「自分でできること」が何かを考え、息子さんの助けを借りて施設の障子を貼ってもらうことにした。このように、本人のできるようにしていただくことがよいが、同時に「失敗させない」ことが重要である。スタッフの一人が弟子役になり、難しい部分は息子さんの助けを借りた。作業を進めると、仕事に厳しかった妥協を許さなかった頃の表情が蘇ってきた。少しの調整があるが、身体が覚えている記憶、人生の中で獲得してきた力を引き出すことができる。このように、生活を共にする家族やスタッフが一緒になって考えることで、「その人らしさ」を取り戻し、心が落ち着いてくる。

認知症は高齢者だけでなく、若い世代でも発症する若年性認知症がある。介護者家族の負担や収入の減少など深刻な状況があり、福祉サービスの充実が求められると同時に、社会参加やサービス利用へのコーディネート過程で、本人・家族の心の整理の支援をしていくことが重要である。

認知症と診断された79歳の女性は、「相手側の会話を認知できないつらさ」「昔のことを一緒に思い出して」「話がかみ合わなくても話して」「何度同じことを言っても聞いて」「道に迷っても行けるように助けて」「必要なサービスが受けられるように助けて」と語っている。認知症の方の意見から求められている支援を考え、向き合い、寄り添う支援が必要。もの忘れへの対応、金銭管理、徘徊SOSネットワークなど、いろいろな支援があるが、家族だからできることや、認知症サポーターとして「習った知識を身近な人に伝える」という支援もある。一人ひとりがチェンジメーカーとして、認知症の人の気持ちを知り、自分に何ができるかを考えることが大切である。

【第2部】官学民協働のコミュニティケア：学生—住民—行政でつなぐリレートーク

コーディネーター 石原逸子（神戸市看護大学 教授）

相原洋子（神戸市看護大学 准教授）

コメンテーター 沖田裕子（NPO 法人認知症の人とみんなのサポート代表）

リレートークを始めるにあたり、コーディネーターの相原准教授より、以下の趣旨説明があった。

健康な地域づくりはそれぞれ共通する目標だが、それぞれの立場によっては可能性や思いが異なる。本学のCOC事業は、「地域住民と共に学び、共に創るコミュニティの拠点創り」を目指し取り組んでいるが、今回はマイクをバトン代わりにして話をつなぎながら、それぞれの立場から、健康な地域づくりについて語っていただきたい。



○島谷奎汐（神戸市看護大学2年生 スコップ所属）

「スコップ」は、神戸市看護大学の地域防災ケアボランティアサークルで、「地域のニーズを取り上げ、face to face の関係に」を理念に活動している。これまでの学習では災害時のコミュニティの大切さを学んだ。災害時の地域の横のつながりは重要で、それがなければどこに誰が住んでいるのかもわからない。地域の中の学生の役割を考えたときに、地域住民と大学をつなぐという役割が大きいと思う。皆さんは普段大学内に入ることは少ないと思うが、学園都市では災害時には大学が避難場所になる。日常から住民と大学とのつながりがなければ円滑な避難ができないので、学生が日常から「つなぐ」という役割を担っていかないと考えている。



○田中優衣（神戸市看護大学3年生 ボランティア部、コーラルレイン所属）



ボランティア部は、脇の浜にあるHAT KOBEの震災復興住宅で、月1回、地域住民の血圧測定や健康相談やラジオ体操など住民との交流を行っている。コーラルレイン（コーラス）は、市内の病院でのコンサートをはじめとした活動をしている。昨今高齢化によるさまざまな問題が取り上げられるが、相互に気にかけて声をかけ合うなど、地域住民の皆さんが主体的にコミュニケーションを行うことが地域全体の活性化につながるのではないかと、HAT KOBEでの活動を通して思っている。その中で学生としてできることは、健康相談を行い健康上の不安を解消することや、体操やコーラスなどを通し住民が集まるきっかけを作ることではないかと思う。今後さらに活動を広げ、地域住民のみなさんに貢献したい。また、看護師になってからも、皆さんが退院後に帰っていく「地域」を考え理解する看護を行いたい。

○塩見萌弥（神戸市看護大学4年生 魔法のはっパー所属）



「魔法のはっパー」は、地域の複数の大学の学生が集まり、西区の大山寺児童館でさまざまなイベントを行っている。活動では、手に棒をつけて大きな絵を描いたり、新聞の山を作ったり、普段できないような大きな遊びを行う。学生によるボランティアは活動段階から入ることが多いが、ここでは「大学生が企画を行う」ことを重視し、地域の子供達にあったもの、必要なものを考え、若い自由な発想で取り組んでいる。他に地域の餅つき大会の裏方なども行っている。活動をしていると、街中で子どもやお母さんによく声をかけられ、自分が「地域に溶け込んでいる」と感じる。「溶け込む力」は、地域のニーズを理解し、地域に入っていく上で大切だと感じている。今後、看護師としても活かしていきたいと思っている。

○高橋千栄子（神戸市須磨区民生委員児童委員協議会 竜が台地区会長）



昨年、神戸市看護大学から地域連携教育のお話を頂き、私たちに何ができるのか考え、このプログラムを「地域の保健室」と名づけ、実施内容を大きな文字で詳しく記載し、住民にお知らせをした。「健康にどれくらい関心を持って下さるのか」「何人の方が来て下さるのか」とときどきしながらお待ちしたのを今も思い出す。学生さんにとっても、地域での演習は学内演習とは大きな違いがあるようで、会場には緊張感が漂っていた。血圧の値が普段より高かった人が不安そうな声を上げると、

学生さんは「計測値が間違っていたのか」と一瞬不安な表情になった。そんな中で私たちが「もう一度測ってみましょうか」と声をかけると住民も学生さんも安心されたようだった。住民の皆さんは孫のような年齢の学生さん達にとっても好意的で、6～7月の暑い中、「学生さんの役に立てるなら」「学生さんを育ててあげたい」という気持ちで何度も足を運んでくださった。おかげで全10回の地域の保健室を開催できたことを私たちも感謝している。今年も「地域の保健室」を行うが、地域の皆さんの健康を見守ることができ、学生さんの学習のお手伝いできればいいなと思っている。そして、学生さんが立派な看護師さんになることを心から願っている。

○岡元名美（神戸市須磨区民生委員児童委員協議会 菅の台地区民生児童委員）

私は半年前に民生委員になったが、はじめの頃は地域の人顔と名前もわからなかった。そんな中、そこから進んでいかないと民生児童委員の仕事は始まらないと思い、1つ1つ取り組んできた。COC事業の話を受けたときも、これからの地域の福祉を考え、住民のつながりをつくる取組みに神戸市看護大学と学生さんが架け橋になってくれていると思った。これからは在宅ケアが今以上に必要になる。今日のリレートークも、「在宅での看護を必要としている人のために、学生さん達と一緒に少しずつ輪を広げて暮らしやすい地域をつくりたい」、「将来、地域で活動する看護師を育成してほしい」という願いで引き受けた。私は介護の仕事をしているが、「家に帰りたい」「最後まで住み慣れた家で暮らしたい」と願う人はたくさんいる。これからは、「地域でみんなが支えあって住み慣れた家で暮らせる街」にしていければと思う。民生委員をはじめ、地域住民も皆が連携して一緒にがんばっていくので、神戸市看護大学の皆さんにもこれからの力添えをお願いしたい。また、行政にもそれを伝えていきたいと思う。



○中塩健彦（神戸市看護大学 教育ボランティア、西区在住）

40数年前に西区に移住した。少しずつ道が整備され、街ができ、1986年に看護大学ができた。私は何度か入退院を繰り返し、看護師に親近感を持っていたことから、他の大学ができたときとは違うある種の期待感のようなものを持った。看護大学からは教員が忙しい間を縫って地域を訪れ、健康教室など住民の健康を支える活動が始まった。今日COC事業の活動が紹介されたが、神戸市看護大学では何年も前からその基盤となる取組みがなされてきたものと思う。数年前からは地域連携教育が始まり、お世話になっている大学のためにお役に立てればと教育ボランティアをお受けした。何回も患者役として実習に参加するうちに学生の真剣な態度に接し、役に立っている気持ちや、教育ボランティアを続けることにささやかながら生きがいを感じるようになってきた。住民の参加は、学生にとって学生同士の演習と違い、より臨場感あふれる学習になったと思う。同時に私にとっても絶対に忘れられない、真剣な学生さんの鮮烈な思い出がある。昨今入院期間の短縮化が進み、地域での療養が主流になってきているが、学生さんが演習や実習を通して地域住民と関わることは、将来看護を行う上での自信や誇りにつながっていくのではないかと思う。



○後藤 靖 (神戸市須磨区北須磨支所保健福祉課 課長)



地方自治体が大学に期待することは、「地域で活動する人材の育成」「研究成果の反映」そして「情報発信」の3つである。今回の須磨区におけるCOC事業の場合で考えると、まずは「地域で活動する看護職の人材育成」である。2025年に団塊の世代が75歳以上に達すると、認知症や介護の必要な人だけでなく、医療面でのニーズの高い人も地域で支えていかなければならない。そうすると医療・看護の知識を持った専門職の人材が地域の中にたくさん必要になる。同時に、医療機関と地域の円滑な移行において、継続看護の視点をもった人材が求められる。COC事業では、訪問看護、継続看護を担う人材の育成、地域志向の高い看護職の育成を目指した取組みをしており、また、北須磨地区において人材育成の取組みを進めていることに期待と感謝をしている。2つ目の「研究成果の地域への反映」では、北須磨地区でもさまざま取組みをさせていただいている。地域の課題を分析していただき、地域の活性化に反映していただきたい。情報発信では、地域を変えていくのは、「若者、よそ者、ばか者」といわれる。「ばか者」とは、既成概念にとらわれない人を指すが、若い力も同じである。既存の枠組みにとらわれない自由な発信をお願いしたい。最後に、個人的な希望として、学生さんには将来、ぜひこの須磨区で活動をしていただきたいと願っている。

○リレートーク終了後、沖田氏から以下のコメントを頂いた。

学生さんは、そこにいるだけで地域の住民に歓迎される。若くて人生経験が少ないからこそできる「若さの特権」がある。それを最大限活かし、今だからできることをしてほしいし、時間を使ってほしい。住民が学生を育てる気持ちで受け入れてくださるのは本当にありがたいことだ。同時に、受け入れる側にとっては「人を育てる」という生きがいにもつながるのだと思う。本当の患者さんとも違うからこそ、患者さんがなかなか言えないことを助言としていただけるのだと思う。また、行政はなかなか自由な発言ができないものだと思う。しかし、実施していることがいいことだとわかるとサポートをしてもらえる。看護大学はそこをデータで示し、住民は行政によいと思うことを伝えてほしいと思う。

○第2部のまとめとして、コーディネーターの石原教授から以下のコメントがあった。

昨年の5月から、北須磨地区において本格的に学生が学ぶ取組みを開始した。先日、COC事業について住民にアンケートをお願いしたところ、まだまだ認知度が低く、継続的に広げていく必要性を感じている。教育ボランティアの中塩さんのお話にあったように、本学は西区での地域貢献活動は長い期間取り組んできて、今回それを基盤に文部科学省にCOC事業の申請をした。これからは西区での取り組みも大事に継続しながら、須磨区にもエリアを広げ、学生が地域の中に出向いて活動し学ぶよう取組んでいく。看護大学は、これまで看護師、助産師、保健師を輩出することで地域とつながってきたが、これからは住民の隣にいて、地域の住民の暮らしがわかる看護師を育成したいと考え、須磨区での学びを継続させていただきたいと考えている。

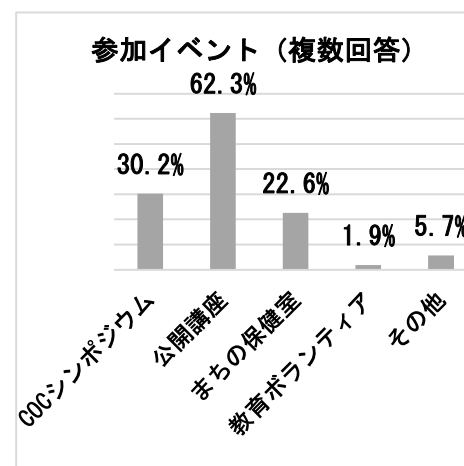
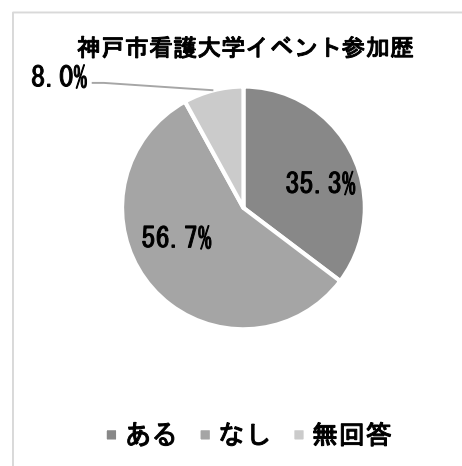
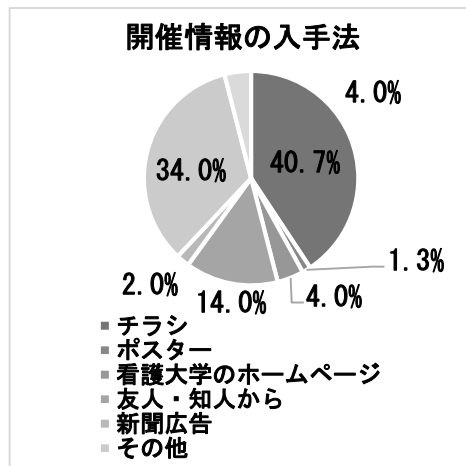
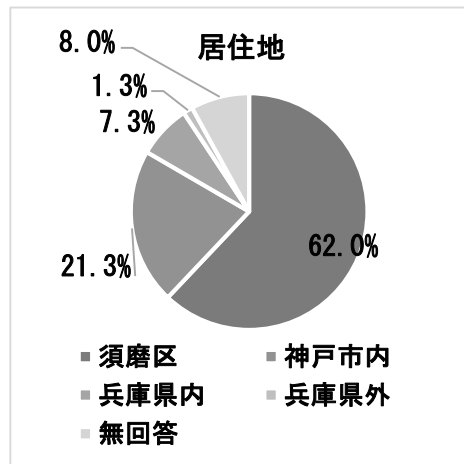
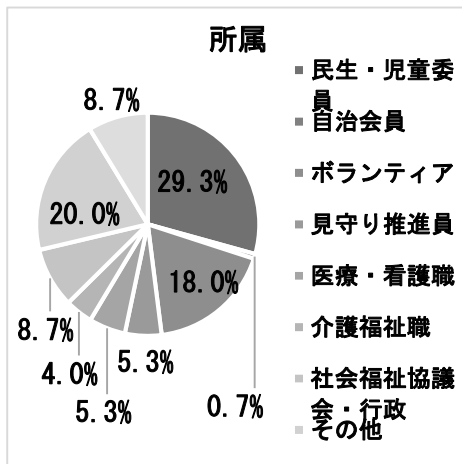
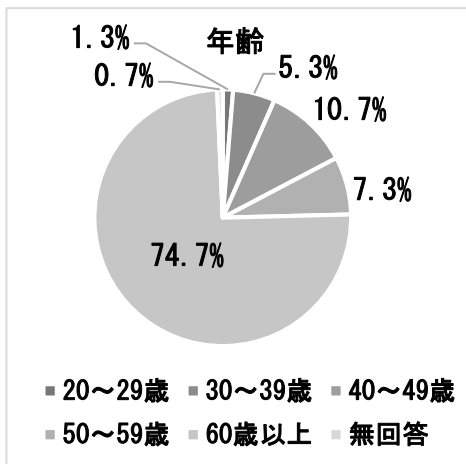


(報告者：地域連携教育・研究センター 石井久仁子)

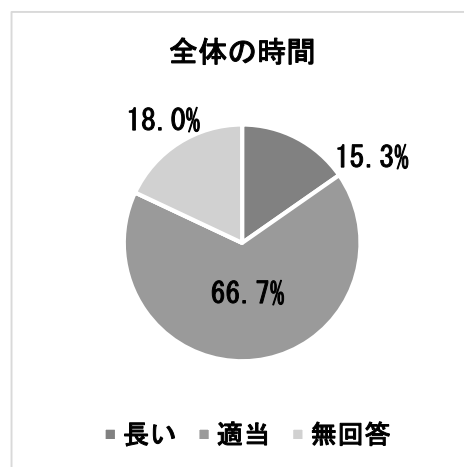
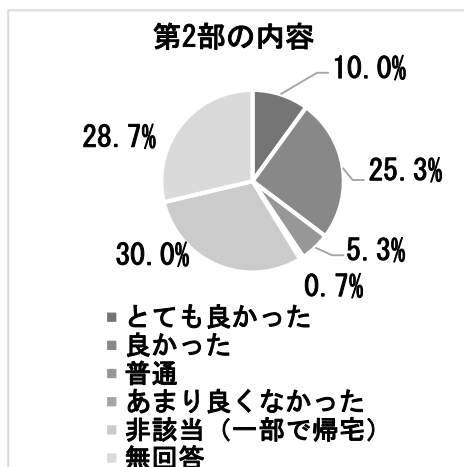
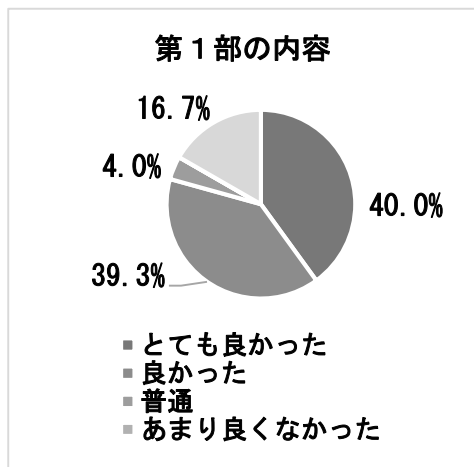
【アンケート結果】

参加者：186名、回答者：150名（回答率80.6%）

1) 参加者の属性



2) 市民公開講座の内容について



3) 自由記載

<全体を通しての意見・感想>

- 認知の方との接し方がわからなかったのですが、少し勉強ができたと思います。将来自分もなるかもしれないと思い、相手の立場に立って接していきたいと思います。
- 1人になった人たちが生活に希望を持てる何かをみつけてあげるとよい。家に閉じこもりの人が多い。
- 若い人と老人をつなげることができることを希望します。
- コミュニティが失われている。地域の清掃作業はしない、花の水やりはしない、地域の事は参加しないと、声を出せる場所がへってきている。誰も知らん人ばかりと、家の中にいる人を喫茶や話し合いの場所を近くで作る、若い学生との交流も元気な町になる。
- 地域住民をうまく（敷居を低く）取り込む共助・共生手法を提案いただきたい。
- 自治会など古い組織の壁や自治会のない地域もある。もっと新しい器づくりをしてもらいたい。
- 初めての参加でしたが、自分が高齢になりつつあり住民同士のつながりの大切さをつくづく感じました。楽しみを見つけることも大事だと思った。
- 地域のことをもっと知らないといけないと思いました。認知症の話が少しでも勉強できてよかったです。
- 今回の公開講座は区役所が会場であり、区の社協がからんでの開催が非常によかった。定期的に市民公開講座を開催してほしい。あわせてチラシを各自治会に送付してほしい。住民に回覧されるので。大変よい講座でした。来年も実施されれば参加します。
- 私自身は聴力も視力も障害者ですが、今回の講座は資料が拡大文字であったし、ループを補聴器で聞けたのでとてもよかったです。ありがとうございます。
- コミュニティの話がしたかったのか、認知症の話がしたかったのか、統一感に欠けるように思いました。
- 看護大とは、今まで医療機関勤務中には実習生のことなどで大変お世話になっていました。今回、初めて市民向けのものに参加させていただくことができ、自分自身が地域を支える側になったこともあって大変興味深く聞くことができました。また今後も機会があれば参加やお手伝いなどもさせていただければと思います。ありがとうございました。
- 看護・介護について重層的に企画、出演者等は非常に勉強になりました。私ももう70歳近くで今まで看護者として、30年以上かかわってきましたが、このCOC市民公開講座を学んで最後の仕事として人生を終わりたいと強く感じました。感謝。
- 沖田氏の「エターナリー」の歌、本当に素敵でした。社協の存在の重要性を認識しました。学生自身がボランティア活動の中から自分の本当の視点に気付いた様子がうれしかった。
- 自宅に帰れなくなった認知症の方に対する支援として、GPSやSOSネットワークへの登録など個別の対応だけではやはり限界があると日頃から感じていました。地域住民の方々の協力が不可欠なことがわかってよかったです。
- 認知症高齢者の方が住み慣れた地域で生活するために、みながそれぞれ役割があることを自覚できたのではないかな。
- 実際に地域で活動されている一緒に協力されているお話しを聞いたことが貴重で、もっとたくさんの人に伝わってほしいと思いました。

- 沖田先生の話が映像を通して、説明してもらえたのでわかりやすかった。社協の話から地域の担い手育成への関わりをすすめていけたらと感じた。
- 医療関係と地域の距離を改めて感じました。が、医療側が地域に目をむけてくれていることはよかったです。認知症を支える地域づくりをするには、この距離をどう縮め協働するのか、学生にしかできないことがあります。これからの活動を期待します。

<大学の取り組みへの要望、期待>

- 地域において活動されていることをあまり知りませんでした。もっと地域住民に PR すれば、地域から大学への希望もたくさんで思う。もっと大学・地域の交流を。
- 地域に太い根をおろした大学を目指してください。ニュータウンのフリーペーパー、コミュニティ紙の発行者に協力を求めたいかがでしょうか。
- 学生との交流の場を設けてほしい。
- 多忙な学生さんと思いますが、若いということだけですばらしいことです。地域に出かけてもらって、住民の方とふれあうことで、どんな人にもパワーをいただきます。勉学がんばって、これからを担う医療従事者になってください。
- 地域福祉センターでの健康講座コミュニケーションなど、地域に出てほしいと思います。学生のあいだの経験が皆さんが大人、高齢になったときにも関係を持つことの必要性を感じてもらえると思います。
- 気軽に地域の行事等、学生の方々に参加してくださり、交流していただけると嬉しいです。小さなふれあい喫茶等に学生がお手伝い、交流できるとうれしい。
- 西区、須磨区だけでなく活動範囲の拡大をお願いしたいです。また高齢者だけでなく精神障がい者等の障がい者の地域生活に対する活動等があるのなら参加させていただきたいと思います。
- 医工連携の地域活動としての取り組みを期待する。ものづくりと企業との予防ケア（認知症他）の研究開発等。
- 極力多数の学生が継続して何らかの活動をするることによる地域活性化。できる範囲内での医療サービスや医療情報の提供。
- あんしんすこやかセンターとの連携
- 実際、体を動かしてどのような活動をしているのか。一般住民にはわからないことが多いので、もう少し広い活動を期待します。
- まちの保健室のように、地域住民の身近な場での活動
- 当大学の主催事業に「協力してください」の立場や「一緒にやりましょう」の立場のように、大学に足場を置いた視点から出ていないように感じる。地域の諸団体の様々な主催事業に対して、学生も教員も一住民として、ボランティア活動に飛び出していき、「相手の立場の活動」を支援するような活動をしてほしい。それを継続していくことで、当大学の認識を地域へ広めることにつながっていくと思います。

<COC 事業について、COC 事業への期待>

- COC 共に学ぶコミュニティ、よくわかった。
- 現在業務でおこなっている地域診断、地域活動とこの研修がつながっていてとてもわかりやすい研修でした。今後も地域のために活動していきたいと思います（住みやすい地域を目指して）。末端の本当に助けが必要な方まで届くようにみんなで活動できたらよいですね。
- 訪問看護の人材養成、地域ケアシステムなど4つの課題への取り組みが育ち、実ることを熱望しています。
- 継続していただき、地域の輪が広がっていくことを期待しています。
- まずは須磨区からという発想かと思われませんが、できれば他の区にも広げてもいいのではないかと思います。西区のように。いろいろと比較できていいのでは。神戸市の看護大学だから。
- 大学は学生のための、研究者のための、というイメージが一般的ですが、今回 COC という取り組みについて詳しくお聞かせいただき、とても素敵なことだと感じました。市民に開かれた大学ということで、ともに問題解決をしていくということが、学生・市民にとっても生きた授業、知の問題解決につながり、よい結果が期待されると思いました。認知症の勉強会に学生さんが同席するのはとても新鮮でした。よい会を開催していただきありがとうございました。



神戸市看護大学
地(知)の拠点整備(COC)事業
シンポジウム2014

地域住民と共に**学**び、共に**創**る
コミュニティケアの拠点づくり

参加無料

テーマ 「地域住民と共に**創**る、地域包括ケアシステム」

日時 2014年12月13日(土) 13:30~17:00
(受付13:00~)

場所 神戸市看護大学ホール
(神戸市営地下鉄 学園都市駅から徒歩10分)

基調講演

「兵庫県及び神戸市における地域包括ケアシステム」
伊澤知法氏 (厚生労働省 健康局総務課)
「住民との協働における専門職の視座と役割」
土屋幸己氏 (富士宮市地域包括支援センター)

パネルディス
カッション

「自治体と看護職の立場から」
平山順子氏 (神戸市北須磨支所保健福祉課)
「委託型地域包括と主任ケアマネージャーの立場から」
三田純子氏 (新長田あんしんすこやかセンター)
「高齢者福祉施設と社会福祉士の立場から」
山内賢治氏 (高齢者ケアセンター ながた)

※お申し込みは、裏面をご参照ください。

問い合わせ先:神戸市看護大学地域連携教育・研究センター TEL 078(794)8080

神戸市看護大学 地（知）の拠点整備事業 2014年度シンポジウム ～地域住民と共に創る、地域包括ケアシステム～

平成26年12月13日（土）、神戸市看護大学 地（知）の拠点整備（COC）事業 2014年度シンポジウムが、本学ホールで開催された。本年度のシンポジウムのテーマは、「地域住民と共に創る、地域包括ケアシステム」とした。国は「高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援の目的のもとで、可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができる」ことを目的に、2025年までに地域の包括的な支援・サービス提供体制である「地域包括ケアシステム」の構築を進めている。地域包括ケアシステムの構築が全国的に大きな課題となっている中、本シンポジウムでは、神戸市における課題や看護職の役割、そして住民の方との協働のあり方などについて考えていくこととした。基調講演では、厚生労働省（前兵庫県高齢対策課）と静岡県富士宮市からそれぞれ講師をお招きし、政策的な見解と先進的な取り組みについてお話いただいた。また地域包括ケアにおける多職種連携について討論するため、市内の行政保健師、地域包括支援センター主任ケアマネージャーと社会福祉士の3職種の方にご登壇いただいた。専門職、地域住民など166人の外部の方に加え、「在宅看護概論」の授業として2年生を中心とした本学学生97人の参加があった。今後さらに多様化するコミュニティケアのニーズに、看護職者としてどのように対応するべきかを考えるよい機会となった。本稿ではシンポジウムの内容を一部抜粋して紹介する。

【開会のあいさつ】鈴木志津枝（神戸市看護大学学長）

本年度より本格的に始動したCOC事業について、教育での取り組みを紹介された。地域に出てヘルスプロモーションやヘルスアセスメントを実施したことについて、「地域住民と共に学び、共に考えていく授業となっている。学生は地域の方のご協力を得て、地域の方がどのように健康に地域で暮らしているか、どのように健康への関心を持っておられるのかなどを学ばせていただいている。またこれらの経験を通し病院実習などでは、病気を持って入院すること、退院した後の生活について多くのことを学ぶ機会となっている」と述べられた。また「本COC事業を通し地域に貢献する大学として、ますます発展していきたい」、さらに「本シンポジウムでは、皆さんとともに地域包括ケアシステムについて学び、多職種連携についてどう進めていくのか一緒に考えていきたい」と開会にあたり挨拶をされた。

【基調講演】 座長 松葉祥一（神戸市看護大学教授）

「兵庫県及び神戸市における地域包括ケアシステム」 伊澤知法氏（厚生労働省健康局総務課）



伊澤氏には、国が推進する地域包括ケアシステムと地域特性に応じたケアシステムづくりに向けて、厚生労働省という現職での立場と兵庫県高齢対策課でのご経験からお話いただいた。地域包括ケアシステムの理解について、「地域」「包括」「ケア」「システム」に分解しキーワードとして捉えること、包括ケアシステムの構成要素（住まい・生活支援/介護予防・介護・医療）を素因数分解し、言葉の一つ一つについて説明をされた。また「包括ケア」とは、病気になったら病院に来ていただくサービスではなく、地域にサービスをデリバリーするというイメージで、それに伴う人員配置やサービス提供の調整のあり方について説明された。包括ケアでは、高齢者本人を中心としたサービスの流れを創っていくことが求められている。高齢化が進む中、多死社会にある現在、その人らしく地域で生活するう

えで、クオリティ・オブ・ライフ（QOL：生活の質）を考えると同時に、クオリティ・オブ・デス（QOD：死の質）についても考えていくことの重要性についても述べられた。

地域の特性に応じたケアシステムの構築という点で、神戸市としては今後 2025 年までに県内でも高齢者の絶対数が圧倒的に増加していく中、すでに 20 年前に高齢化が進んでいた但馬市や丹波市などの事例を参考に取り組みの必要性について述べられた。またスウェーデンでの勤務経験を通じ、日本における在宅医療の課題を次のように挙げられた。「北欧と比較し、在宅死亡率が 13%と低い日本では、その背景として最も考えられるのが訪問看護師の数の少なさにある。今後、訪問看護師数を増やすことが課題である。」本学での講演ということで、「医療と看護」に焦点を当て「QOLやQODを考えたとき、病院は看取りの場ではなく、回復する場所である。病院で働く医療職も、治療や回復の支援をしているのであり、地域で亡くなることは、本人・医療者にとっても双方が望むべきこと」と病院看護師としての本来望むべき姿と、「在院日数が短くなる中、急性期においても退院ケースが増えており、退院ケースの7~8割は病棟看護師が退院調整を行っている。そのような意味においても地域での生活のことを考えられる看護師が必要である」と生活をイメージできる看護師の重要性について述べられた。在宅療養支援を進めるうえで、多職種と連携し地域でその人を支えていく看護師としてがんばってほしい、と本学学生にエールを送られた。

「住民との協働 地域包括ケアシステム構築の取り組み」 土屋幸己氏（富士宮市福祉総合相談課）



富士宮市地域包括支援センター長を務め、現在同市において福祉総合相談課に
おられる土屋氏からは、地域包括ケアシステムで求められる「自助・互助・共助」
について、富士宮市での活動事例をもとにお話いただいた。冒頭、土屋氏は「地
域包括ケアシステムの構築を進めるうえで、多様なニーズへの対応が求められ
ている中、医療や介護といったサービス提供の施設が分断されてしまっている」
と問題提起されました。分断されたサービスの提供を統合し、本人の状態が変わっ

ても継続的に支援をしていく必要性が求められていると。地域包括ケアシステムの構築の目的は、高齢者の尊厳保持と自立生活支援である。継続的に尊厳を保持したケアを提供していくには、介護保険や医療保険でのサービスのみでは対応することが困難であり、インフォーマルな支援を含めた「互助」が重要なキーワードであると説明された。また互助を含めた包括ケアの構築には、地域住民の意識や考えなどが必ず関わってくるため、画一的なシステムではなく、市町村独自のシステムづくりの必要性を挙げられた。包括ケアを地域で実施する意味として、要介護状態になる前から地域住民との関わりや信頼関係を築きあげる「地域生活」の状態を維持することがあると説明された。

住民と協働した地域包括ケアシステムの構築にむけ、富士宮市では「民・産・学・官」という言葉を使い、それぞれの役割について説明を行ってきたとのこと。「民」は家族や住民、インフォーマル組織、「産」はコンビニ、郵便局や銀行などの事業所、「学」は小中高校、そしてそこに行政としての「官」が入る。富士宮市では、「民」の取り組みとして、「地域住民が地域福祉の推進に努めなければならない」ことが法律に定められているとし、社会福祉協議会と協働で地域福祉活動計画への参画を行っている。「産」の取り組みでは、コンビニや郵便局、銀行職員が認知症サポート研修を受講することで、専門機関につなげている事例を紹介された。「学」の取り組みでは、小中高で認知症研修を実施し、その効果として子どもが家庭でその話をすることで家族の認知症の意識も高まること、また研修を受けた子どもたちが、グループホームなどのボランティアに申し出るようになったとのこと。さらに「官」では、市議会議員全員が地域包括ケアに関する講習を受ける取り組みをされている。尊厳のある地域生活の継続の

目的を達成するためには、民・産・学・官の共通理解とそれぞれの役割について主体的に考えていくことの重要性について述べられた。富士宮市ではこの取り組みを9年かけて少しずつ行ってきたとのこと。地域包括ケアシステムの基本理念である「尊厳の保持」「自立生活の支援」「規範的統合」の中で、「規範的統合」を行うこと、すなわち関係者が同じ考えを持って取り組むことが重要であると結ばれた。

基調講演まとめ

両氏からの講演から、それぞれの地域でどのように包括ケアシステムを展開していくべきかを学んだ。基調講演結びとして、座長の松葉教授より、地域包括ケアシステムで使われている『システム』という言葉が、すでにできあがったものがあり、それをそれぞれの地域に当てはめればよいという誤解を生んでいるという示唆をされた。私たちがそれぞれの地域で創りあげていくものであり、またそのためには町内会の掲示板を見て、そこには何が書かれているかと注目することで、まずは自分たちが住んでいる地域から考えていくことの大切さを述べられた。

【パネルディスカッション】座長 二宮啓子（神戸市看護大学 副学長）

森田文明（神戸市看護大学 事務局長）

「地域包括ケアシステムの構築をめざして」 平山順子氏（須磨区北須磨支所保健福祉課）



行政保健師として働かれている平山氏からは、須磨区の保健福祉課の取り組みの紹介とともに、行政の立場、看護職者の立場から考える地域包括ケアシステムについてご説明いただいた。須磨区は、本COC事業の対象地域であり、高齢化率28%と神戸市全体より少し高い区となっている。特に須磨区北部で、平山氏が所属する北須磨支所管内は、「ニュータウン」として開発された街である。そこには社会で活躍されてきた方が多く住まれており、その方たちが今後、一斉に高齢者となっていくなか、どのように高齢化対策を進めていくかというのは、全国からも注目されていることだと。須磨区にある8つの地域包括支援センターでは、現在、2センターをモデル事業所として選定し、地域ケア会議を開くなど活動を行っている。この地域ケア会議では、専門職や地域住民、社会福祉協議会など、多数の関係者が集まっている。そこでの行政での役割としては、センターをつなぐ広域で組織的なつながり、ネットワークの構築を担っているとのこと。また様々な専門職連絡会を開催している中で、高齢者ケアや人材育成における共通した課題も見えてきていると。共通課題を解決するうえで、行政保健師としては連絡会同士をつなげる役割もあると述べられた。さらに行政保健師だからできる関わりとし、消防署や警察、健康福祉課、まちづくり課や社会福祉協議会などの行政部署同士の横のつながりを創っていくことがあると。最後に看護師を目指す、本学学生に「生活モデルとして考えるアセスメント能力を向上してほしい。現在COC事業で地域の方と連携をとって、生活をみる授業を受けている中で、学生を受け入れてくださっている住民の生活をぜひみていただきたい。医療と介護をつなぐのが看護職の役割である。また保健師として個人の視点と地域社会の健康課題の視点を往復してみることも大切である。地域の健康課題をつかみ健康なまちづくりにむけてほしい」と、期待を述べられた。

「地域住民と共に学び、共に創る地域包括ケアシステム」



三田純子氏（新長田あんしんすこやかセンター）

長田区で主任ケアマネージャーとして働かれている三田氏からは、委託型地域包括支援センターの主任介護支援専門員の立場としてお話いただいた。長田区の高齢化率は31%と、市内で一番高齢化率の高い区となっている。地域包括支援センターは、長田区では7センターあるが、課題としては地域住民の方の周知が低いことがあげられた。そのため自治会を通じて周知することで、介護について早期に認識してもらい取り組みを行っている。神戸市のあんしんすこやかセンターでは、看護職、社会福祉士、主任ケアマネージャー、見守り推進員の4職種がチームをつくり連携してサービスを提供している。お互いが連携してケアを行っていくうえで、今年度より区内7センターにおいて4職種が、社会福祉協議会や行政と協働し地域ケア会議を開催しているとのこと。「まだまだ発展途上ではあるが、地域ケア会議に参加することでそれぞれの専門職の立場だけでなく、より地域や高齢者の生活を意識するようになっており、地域課題の解決にむけて進んでいっている」と述べられた。長田区では大きな商店街があり、喫茶店も多いという特性から、商店や喫茶店を巻き込むような取り組みが進む一方、高齢化が進みすぎている地域では、住民だけでは対応しきれないという課題も提示された。主任ケアマネージャーとしては、医療との連携を円滑に行ううえで質の高いケアプランを提供すること、さらに顔の見える関係づくりを行っていく役割があると述べられた。本シンポジウムでは多くの病院関係者、さらに本学学生の参加があり、最後に「生活者・住民視点からケアシステムを考え、また住民の力を信じることや専門職が互いの役割を理解し合うことが大切」と述べられた。

「高齢者福祉施設と社会福祉士の立場から」 山内賢治氏（高齢者ケアセンターながた）



社会福祉士として、また高齢者福祉施設長を務められている山内氏からは、実務者という立場で地域包括ケアシステムについてご説明いただいた。地域包括ケアシステムを考えると、地域住民として自宅を拠点として地域生活を送る、イメージや自立支援のステージというものが大切と、話された。介護が必要となった高齢者を地域でみることに、多くの家族は強い不安を持っているため、介護が必要になったら施設へと考えてしまう。その意味でも高齢者施設は、介護が必要となった方のセーフティネットの役割があるが、高齢者施設＝施設入居者としてみてしまうのではなく、地域に暮らす地域住民であるという意識を、本人、そして施設職員も強く持つ必要がある。また特別養護老人ホームなど、生活施設としての機能がある場所でも、入所している方の多くは医療処置を必要とする方が多く、医療と介護の連携が強く求められていることを、実感しているとのこと。さらに相談員・支援員としての機能をもつ社会福祉士から見た現状として、これから増え続けていく単身・老老世帯が孤立していかないように、どのように支援していくのかのモデリングの必要性について述べられた。長田区では震災後に多くの復興支援住宅が建設され、そして現在その多くが超高齢化となっている「限界住宅」になっている。共生ということも大切だが、このような限界住宅では、自治会も存在しないことが多く、そこに介護職がどのように介入していくのが課題であると。地域に暮らす方が、必要とする社会資源、必要とする人に結びついていないという現状もあるとのこと。地域資源としての鉱脈を見つけ出すことの重要性について話された。鉱脈の例として、高齢者の85%が健康であるというデータから、元気高齢者を活用した取り組みが必要であると。また大学も地域における大

切な資源の一つであり、大学にいる 1 人 1 人が地域包括ケアシステムについて考えていくことも、大きな力になると述べられた。

【パネルディスカッション】

討論会では、パネリストとしてご登壇いただいた 3 名の方に加え、基調講演の演者である伊澤氏、土屋氏にもコメンテーターとしてご登壇いただいた。

「3 職種の役割と課題について」

<伊澤氏>「まず地域包括ケアシステムを説明する際に、医療は垂直、地域・福祉は水平という考えはわかりやすいと思った。例えば医療では、医者を頂点とすることでうまく動いている部分がある。しかし今後地域包括ケアシステムでは、垂直の医療と水平の地域福祉の結びつきをどのようにするかが、重要になってくる。その役割を担う行政としては葛藤があるのではないだろうか。今後、地域包括ケアシステムにおいて期待される職種は、生活を視ることをきちんと教育された看護師と、生活をみながら医療訓練を行えるリハビリ職である。また本日の講演の中でも、認知症に関する話題が多くでてきていたように、認知症と地域づくりについて理解していくことが大切になってくる」

<土屋氏>「地域包括ケアシステムの絵にある、受け皿の部分には、本人・家族の選択と心構えとあるが、そこには本人や家族が自分の住まい方を自分で決めなければならない、という覚悟が必要になってくることを伝えたい。また山内氏の講演において、気づかされたが、これまで施設に入るといことは地域から排除するイメージであったが、高齢者福祉施設においても、地域生活を意識することの重要性、つまり本人に一番近い環境をよくする・地域をよくするということにつながると感じた」

「地域包括ケアシステム構築を実現するうえで不足している課題について」

<平山氏>「地域に応じたシステム創りが求められているうえで、地域特性をきちんと把握することが大切。地域診断という教育が看護学生にあるが、地域診断の情報に基づいた地域ケアシステムの創り方、地域ケア会議の実施が必要である」

<三田氏>「情報の発信が重要。住民にも知ってもらうことが大切なので、一緒に考えていく場が必要である」

<山内氏>「地域というのを細かな生き物として捉えていき、その中にどのような人がうごめいているのかを知って、顔の見える関係性を創っていくことが求められる。今、地域包括ケアシステムは中学校区単位でまとめられているが、もっと小さな・細かな地域で考えていくのも良いのではないかと思う」



「できるだけ細かな地域でとらえるための取り組みについて」

<土屋氏>「1人1人がとらえる地域はそれぞれである。生活圏域の中にある、町内会や自治会での課題は何かというように、それぞれのステージごとに考えていくことが重要である。どこでなにがおきているのかを把握し、ばらばらに考える『地域』を理解する必要がある。本来の地域ケア会議のあり方である、個別の課題から入って個別支援のあり方を検討していき、地域の課題としてとらえていくことが重要ではないだろうか」

「認知症の方を中心にした地域づくりについて」

<山内氏>「特に地域で問題になるのが、火災である。認知症の方が火災を出すことにより、地域から排除されてしまう。火災を出さないようなハード面からの支援が必要。また元気なうちから認知症になった時にどうしたいのか、近隣との関係性や仕組みづくりを実践していくことが必要である」

<三田氏>「尊厳を保つという意味においても、地域包括ケアシステムを考えるとときに、認知症はそのきっかけとなる。元気な時を知っているのは住民さんなので、その住民の方に専門職も一緒に入って支援していくことが大切」

<土屋氏>「認知症になったら、何もできなくなるというイメージがある。富士宮市では、まず認知症という病態について知ってもらうことにより、認知症でもできることがあるという理解がうまれた。今は若年性認知症の方もピアーとして活動されていることがある。このような活動を通して、家族の方が認知症の親を地域でみていくという意識が生まれ、住民の方も迷子になったときに発見するというシステムができあがってくる。地域生活を支えるには、まず状態を知ることが必要であり、それにより他の住民も、いつか自分が認知症になった時に誰かが見守ってくれるという安心感がでてくるようになる」

「医療の場で認知症をみていくための打開策について」

<伊澤氏>「まだ打開策はない。というのは、医療界が本気になっていない。認知症の対応について、きちんと考えていくべき。医療界のトップリーダーが、決断をもって考えていく必要がある」



「多職種間の連携について」

＜平山氏＞「個別のケースについては、連携をとり始めていると思う。行政に関わる事例は虐待など困難事例が多いが、それらについては、多くの職種が連携することに力を出してきている。一方でこの連携を地域にむすびつけていくのが、これから必要かと思う」

＜三田氏＞「ケースを通じての連携はできている。主任ケアマネージャーの立場からも、以前は医師との連携に課題があったが、今は垣根を越えて関わりが持っているし、薬剤師からも協力の声が出てきている。一方で在宅リハビリを行える人が少ないという現状から、リハビリとの連携に課題がある」

＜山内氏＞「各職種が出会う場面は、はるかに増えている。昔は、他職種といって、他者という認識であったが、今は多くの多職種として一つの目的をもってチームを組んで動くようになっている」



最後に、二宮副学長より「地域包括ケアシステムについて、各職種、さらには住民も含めた共通理解が必要だと再認識した。地域包括ケアシステムの構築にむけ問題は複雑であるが、何が私たちにできるのか、学生も地域包括ケアシステムの理念の理解から深め、看護職としての役割について考えていけるような教育をしていきたい」と結ばれた。

「閉会のあいさつ」石原逸子（神戸市看護大学教授）

本シンポジウムでは行政、医療、介護の分野と多角的な視点から「地域包括ケアシステム」について学ぶ機会となった。本シンポジウムの閉会にあたり、石原教授より「地域の特性に応じた地域包括ケアシステムの構築にむけ、人口動態的な視点から訪問看護師の量的な必要性、継続看護の質的な重要性、さらに住民の協働による連携について演者よりご指摘がありました。本シンポジウムの討論を受け、住民の方から学ぶ姿勢、継続看護の人材育成、そして訪問看護の志向性の高い人材の育成の重要性ということで、本学 COC 事業を着実に進めていくことが再認識された」と挨拶を述べられた。

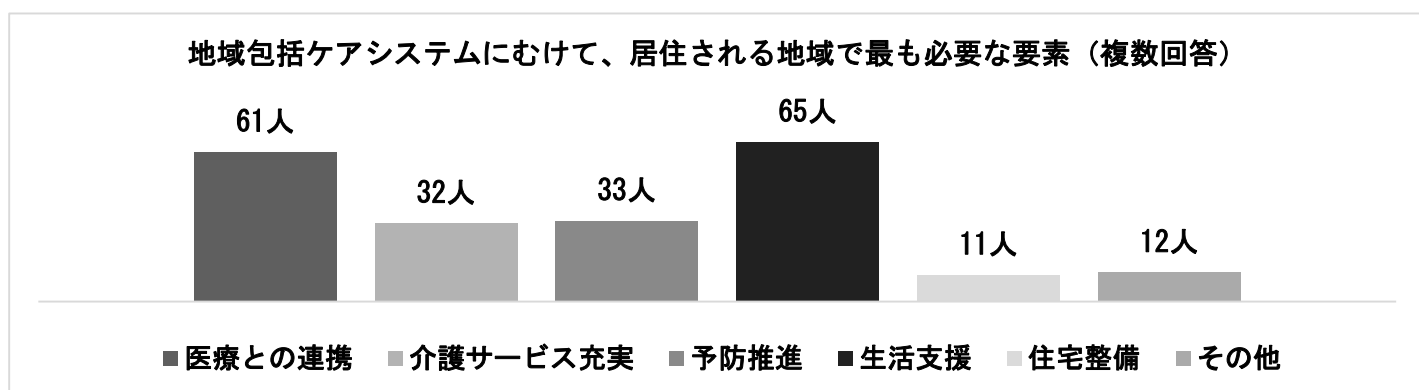
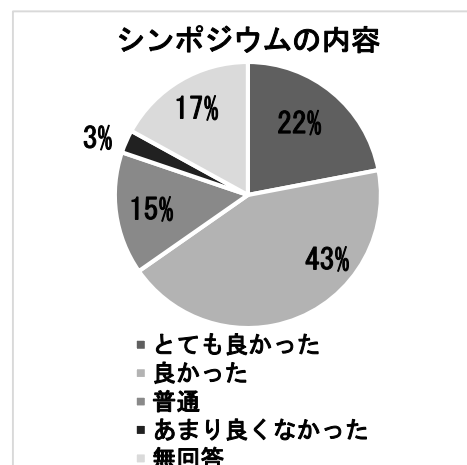
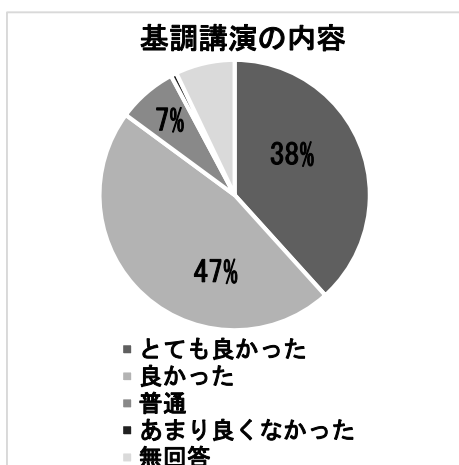
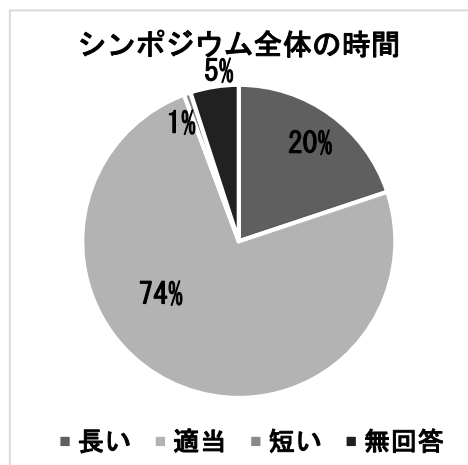
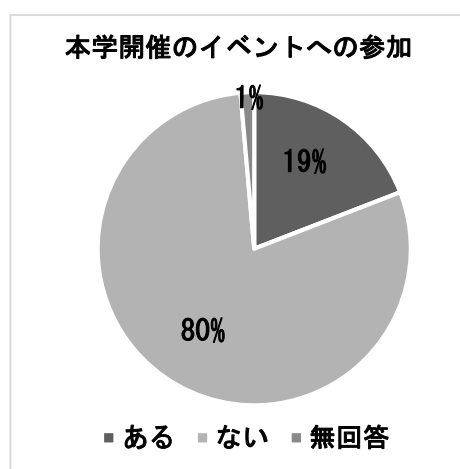
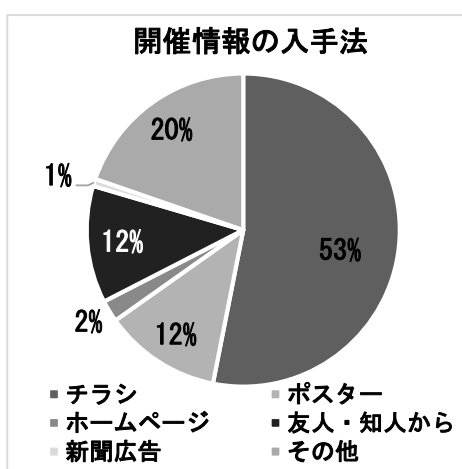
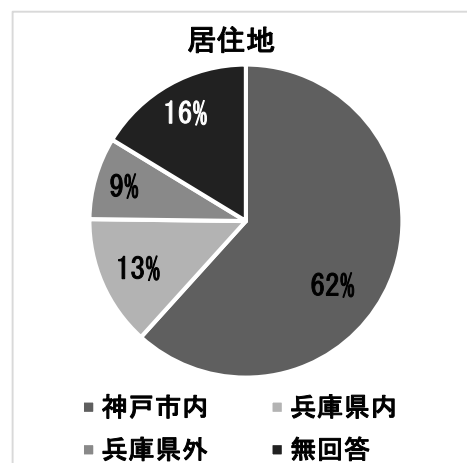
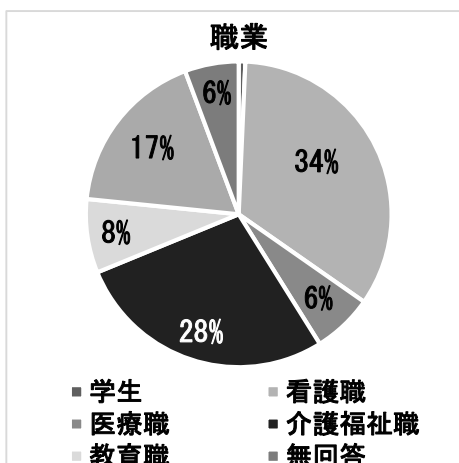
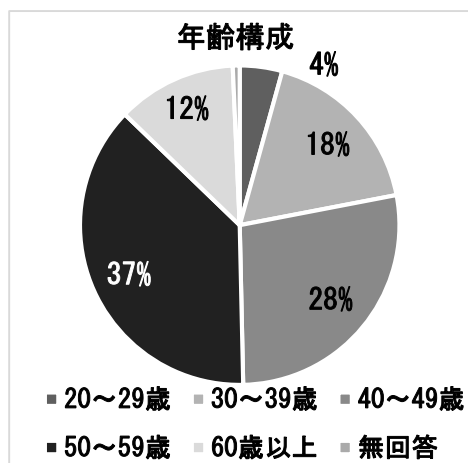
（報告者：地域連携教育・研究センター 相原洋子）

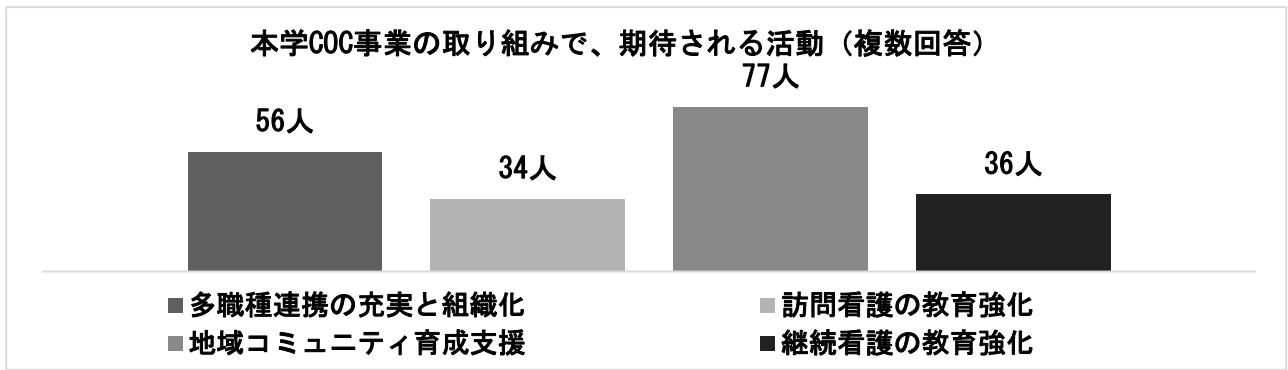


講師・パネリスト・関係者と

【アンケート結果】

●回答者：141人（男性 42人、女性 96人、無回答 3人）





<自由回答>

- 国や行政の動向、施策などよく理解できました。高齢者、要支援者を見守るべき地域を育てる事の重要性を認識いたしました。
- 基調講演とシンポジウムが、いい形で結びついた内容でした。大学で本日のテーマに取り組んでいたことが、とてもよかった。
- 予防の推進は適切なのか？介護サービスにすぐにつながるような事業者、住民さんへの意識付けが必要である。
- 1人の医療職者として、1人の住民として、自分に求められることを深く考える機会になりました。これからは、地域の住民としての意識ももって、高齢化社会を考えていこうと思います。
- 医療と地域の連携の必要性は理解できました。しかし、具体的にそれぞれの専門職種とどう連携していけばよいか等、具体的に実施している例があれば参考になります。
- 西区のリハ専門職（PT,OT,ST）のネットワークの事務局を担当しています。連携、顔の見える関係づくりに向け活動を行っていますが、非常に有意義なシンポジウムでした。
- 学園都市も高齢者が多くなりました。認知症の疑いのある人は外出させないようにしています。COCの取り組むべき点です。
- 基調講演の2人の話は、非常にわかりやすく、実践内容も含まれていたもので、地域包括ケアという意味をよく理解することができました。講師としてのレベルも高く、満足しました。私自身は、病院内の看護職ですが、今回このシンポジウムから「地域住民」として、やらなければならないことを考えさせられる機会になりました。本日は参加してよかったです。ありがとうございました。今後の大学の取り組み、期待しております。
- 地域包括ケアシステムを支える人材養成が急務であると思います。「医療」と「介護」「福祉」の現場では、組織運営の視点が異なるため、「かかりつけ医」の負担を軽減するためにも、OT、PTや看護師が医療情報にアクセスできる仕組みづくりや処遇改善など、インセンティブを構築することが重要であると思いました。
- 病院と地域との連携をどうするのかと思っていましたが、地域全体の中で病院の役割を考えていかなければならないと思いました。
- 訪問看護師の大切さはよくわかるが、実際の現場では若い看護師がターミナルで看取る状況にある。不安、高齢者の生活が理解出来ない等で離職するものが多い。看護師育成の中でメンタルを強くすることは難しいが、バックアップ体制の強化やネットワークが必要。
- 貴重な実践報告が聞けて勉強になりました。地域包括ケアシステムはこれからもっと進めていくべきですが、神戸市の現状がよく理解できました。今後、医療との連携強化が必要かと思います。

2014年度 COC 事業における神戸市看護大学まちの保健室出前講座の実施

神戸市看護大学まちの保健室（以下、「まちの保健室」とする）は、神戸市看護大学と兵庫県看護協会西部支部が協賛して実施している事業で、神戸市西区を拠点に地域住民の健康ニーズを考慮した活動を行っている。COC 事業では、「まちの保健室出前講座」として須磨区での活動を展開しており、H26年度は、5回開催し、延べ108名の住民が参加した。

実施時期	種類、テーマ等
H26年5月22日（木） 13：20～14：20	<u>健康講座</u> 「笑い与健康～笑いで認知症予防～」 参加者：32名（男性8名、女性24名） 於：須磨パティオホール
H26年9月11日（木） 13：30～15：00	<u>コミュニティ育成支援事業</u> 「生活習慣病予防」と「フットケア」についての健康講座 参加者24名（男性2名、女性22名） 於：竜が台地域福祉センター
H26年9月16日（火） 13：30～15：00	<u>コミュニティ育成支援事業</u> 「高齢者に多い疾病予防」と「介護予防」についての健康講座 参加者56名（男性10名、女性46名） 於：菅の台地域福祉センター
H27年1月8日（木） 15：00～16：20	<u>もの忘れ看護相談</u> 「認知症」に関するミニ講座と意見交換 対象者：民生児童委員10名（男性1名、女性9名） 於：竜が台地域福祉センター
H27年1月22日（木） 14：00～16：00	<u>こころと身体の看護相談</u> 「リラクゼーション」をテーマに、ミニ講義と呼吸法、漸進式筋弛緩法の体験 参加者6名（男性0名、女性6名） 於：北須磨文化センター

1) 笑い与健康～笑いで認知症予防～

認知症予防における「笑い」の効用についての講演と、「笑いヨガ」などの体験を行った。本講義は、コラボ教育として、本学のヘルスプロモーション論の授業枠の中で、地域住民にとって関心の高いテーマを地域住民のアクセスのよい会場で実施し、地域住民に対しては健康に関する知識・情報を提供し、学生は地域住民に対する健康増進のアプローチを実際にみて学ぶとことを目的に実施した。「笑いヨガ」の体験では、学生が住民参加者の間に入ってモデルになり、住民参加者が体験に加わる雰囲気づくりの一助になった。終了後の住民参加者のアンケートでは6割の参加者が「とても満足」と回答し、「日常生活の中で簡単にできる健康法を教えてください、ありがとうございました」「歩行は少し不自由ですが、笑うことは十分できるので、これからも笑っていけるよう

にします」などの回答があった。COC 事業が始動して間もない時期の開催であり、広報については地区の民生児童委員の協力を頼るところが大きかったため、今後さらに広報や COC 事業の周知を進めていく必要がある。

2) コミュニティ育成支援事業

コミュニティ育成支援事業は、地域住民に対する健康相談・ミニ講習・健康測定などの健康増進活動を通し、地域の民生委員・児童委員や地域ボランティア等と協働して、地域住民のネットワークづくりや地域のリーダーづくりの支援を行うことを目的とした取り組みである。H26 年度は、2 年生が「基礎看護学術演習Ⅲ」の学外演習で実施した地域住民の健康測定の結果をもとに、該当地区の住民を対象に健康講座を実施した。その中でも菅の台においては、一人暮らし高齢者を対象にした「ふれあい給食会」後、肺炎予防や予防接種の助成などの内容で健康講座を実施したところ、健康や福祉に関する情報を知らない人が多いことがわかった。高齢になり、外出や交流の機会が減ると、健康情報を得る機会も少なくなる。そのため、今後地域住民との協働しながら、地域の特性を踏まえた上で、ネットワークづくりや地域のリーダーづくりの支援を推進していく必要がある。



ミニ健康講座（竜が台）



ミニ健康講座（菅の台）

3) もの忘れ看護相談

「もの忘れ看護相談」は平成 24 年 3 月に開設し、本学で年間 4 回、もの忘れや認知症に関する不安や困りごとを抱えた方を対象に知識の啓発や個別相談を実施している。また、「もの忘れ看護相談」事業を基盤とした研究的な取り組みとして、地域の専門職との事例検討会を行い、認知症高齢者とその家族への地域支援体制や看護相談のあり方について検討してきた。平成 26 年度は、COC 事業として新たに須磨区での活動を開始した。活動の開始にあたって、該当地区の行政担当者や民生児童委員の代表者の意向確認を行い、本学での相談活動とは異なる状況（個別相談の場がない、継続支援の難しさ）での活動の在り方を検討した。検討内容をふまえ、今年度は、もの忘れや認知症の人を支援する立場にある民生児童委員を対象とし、活動支援とニーズ把握を目的にミニ講義と意見交換を行った。

ミニ講義では、本学で実施しているもの忘れ看護相談の活動概要を紹介した上で、認知症に関する知識として、記憶障害以外の症状（失語や見当識障害といわれる症状）や早期発見の重要性などについて説明した。また、聞き手がイメージしやすいように、身近な具体例を挙げる、図や写真などの視覚情報を多く用いるなどの工夫をした。参加者からは「今まで研修を受けたことはあるが、講義の内容も資料もわかりやすく、理解しやすかった」「住民にも認知症のことを知ってほしいので資料を提供してほしい」などの意見があがった。また、その後の意見交換では、民生児童委員が日頃の見守り活動や相談（対応）の中で感じている迷いや悩みについての質問や相談が多数あがった。終了後は、「こうして専門家と話し、助言を聴くことで、安心して住民の相談対応ができる」との感想が複数みられた。専門的視点での助言や支援を行うことは、見守り活動や相談を行う民生児童委員の安心感や自信につながり、地域住民にとってもよい効果をもたらすものと考えられる。同時に、事業を継続することは、民生児童委員を通じて地域住民の広報啓発にもつながっていくと思われる。次年度も年 1～2

回の開催を予定している。

4) ところと身体の看護相談

「ところと身体の看護相談」は平成 19 年 6 月より毎月 1 回、精神看護学を専門とする大学教員や大学院生が、心の悩みをもつ人やそのご家族の看護相談にあたるものである。開催場所は、西区の大学共同利用施設である。広報活動は、神戸市看護大学前掲示板及びホームページへの掲載、「まちの保健室」のポスターへの情報掲示の他、「看護相談」独自のポスターを作成して、大学共同利用施設内掲示板をはじめ、大学所在地の自治会を通じて大学周辺地域にある商業施設や診療所等の掲示板、回覧板への掲示・掲載をおこなっている。また平成 25 年 1 月からは、従来の西区、垂水区に加え、須磨区の「広報 KOBE」（神戸市報）にも年 2 回の掲載を行った。新規相談件数は前年と比べ平成 25 年度以降で微増している。新規相談者のうち、須磨区居住者は、平成 24 年度は 0 件であったものが、平成 25 年度に 2 件、平成 26 年度に 2 件となっている（表 1.）。また相談者からも「広報を見た」という方がおり、広報配布地域を拡大した結果、看護相談が須磨区に浸透しつつある状態と考えられる。今後も広報を続け、須磨区への定着を図りたい。

表 1. 年度毎の相談件数

年度 (平成)	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度	23 年度	24 年度	25 年度	26 年度
相談件数	48 件	58 件	71 件	96 件	120 件	75 件	116 件	73 件*
うち新規	—	—	—	—	21 件	11 件	17 件	15 件
須磨区居 住	—	—	—	—	—	0 件	2 件	2 件

*平成 26 年度は 1 月末現在の件数

また今年度は、相談事業の一環として、H27 年 1 月 22 日（木）にリラクゼーションプログラムを須磨区にて実施した。大学院生 2 名によるストレスとリラクゼーションについてのミニ講義と、リラクゼーション演習として、呼吸法と漸進的筋弛緩法を実施し、参加者は女性 6 名であった。終了後、参加者の感想をお聞きしたところ、「呼吸が深くなりリラックスできた」「身体のどこに力が入っていたかわかった」「足の先まで身体が温かくなった」など、効果を実感された様子であった。今回、須磨区での開催ははじめてであり、開催情報が十分に浸透しなかった感があるので、西区での開催情報も含めて、広報の方法を検討していきたい。



ミニ講義



漸進式呼吸法

その他の社会貢献活動

1. 民生委員・主任児童委員実務マニュアル作成支援

須磨区では、民生児童委員の活動を支援し、推進すること目的に、業務範囲や活動内容を具体的に記載した「民生委員・主任児童委員実務マニュアル」を作成した。実行委員会には本学教員も参画し、民生児童委員の現状やニーズを明確化するため、須磨区と共同で事前アンケートとヒアリングを行った。アンケートの結果（民生委員・児童委員 206 名から回収）、民生児童委員が活動の中で感じる困りごとは「後任を探すこと」が 56%と最も高く、次いで「相談においてどこまで関わればよいのか迷う」36%、「関わりを拒む人への対応」35%、「個人情報取り扱い」34%であることがわかった。ヒアリングでは、アンケート結果をもとに、「課題と活動の中での対応策」、「民生児童委員の活動を行ってよかったと感じること」などについて明らかにし、マニュアルに反映できるよう整理した。1月29日には実務マニュアル試案の確認を行い、来年度には民生児童委員に配布される予定である。

開催日時	内容	検討事項
H26年5月29日（木）	第1回実行委員会	実務マニュアルに関する目標、理念、方向性の検討
H26年7月31日（木）	第2回実行委員会	実務マニュアルの企画、内容、構成の検討
H26年9月6日（月）	民生委員・児童委員へのヒアリング	
H26年9月26日（金）	第3回実行委員会	実務マニュアルの章立て検討
H26年11月28日（金）	第4回実行委員会	実務マニュアル内容詳細検討
H27年1月29日（木）	第5回実行委員会	実務マニュアル試案検討

2. 須磨区民生委員・主任児童委員研修での講義

「須磨区民生委員・児童委員協議会全体研修」において、本学教員が講師となり、認知症をテーマに講義とワークショップを行った。前半は、ケースメソッドを用いて、「認知症の人を地域でどのように発見し、支えるか」のグループディスカッションを行い、後半は、「みんなで考えるこれからの認知症」をテーマに講演を実施した。研修会には、須磨区全域の民生委員・児童委員約210名が参加し、研修後のアンケートでは、「認知症の知識もたくさん増えたので、活用したいと思う」「認知症について、大分わかったように思う。今回の研修を受けられてよかった」「地域の人たちと連携を深めて、みんなで助け合えるような社会づくりを心がけていきたい」などの感想があった。

開催日時	1) H26年11月14日（金） 2) H26年11月21日（金）
会場	須磨区役所
参加者	須磨区民生委員・児童委員 約210名

3. 地域事業への参加

地域のイベントに教員が出席し、健康情報の提供や広報を行った。

竜が台ふれあい喫茶	月1回の開催日に出席し、9月は健康講座を実施。 1月、2月は健康情報を提供
菅の台ふれあい給食	6月、7月、9月の開催日に出席、9月は健康講座を実施
竜が台敬老会	H26年9月7日（土）出席 於：竜が台小学校
菅の台敬老会	H26年9月7日（土）出席 於：菅の台地域福祉センター